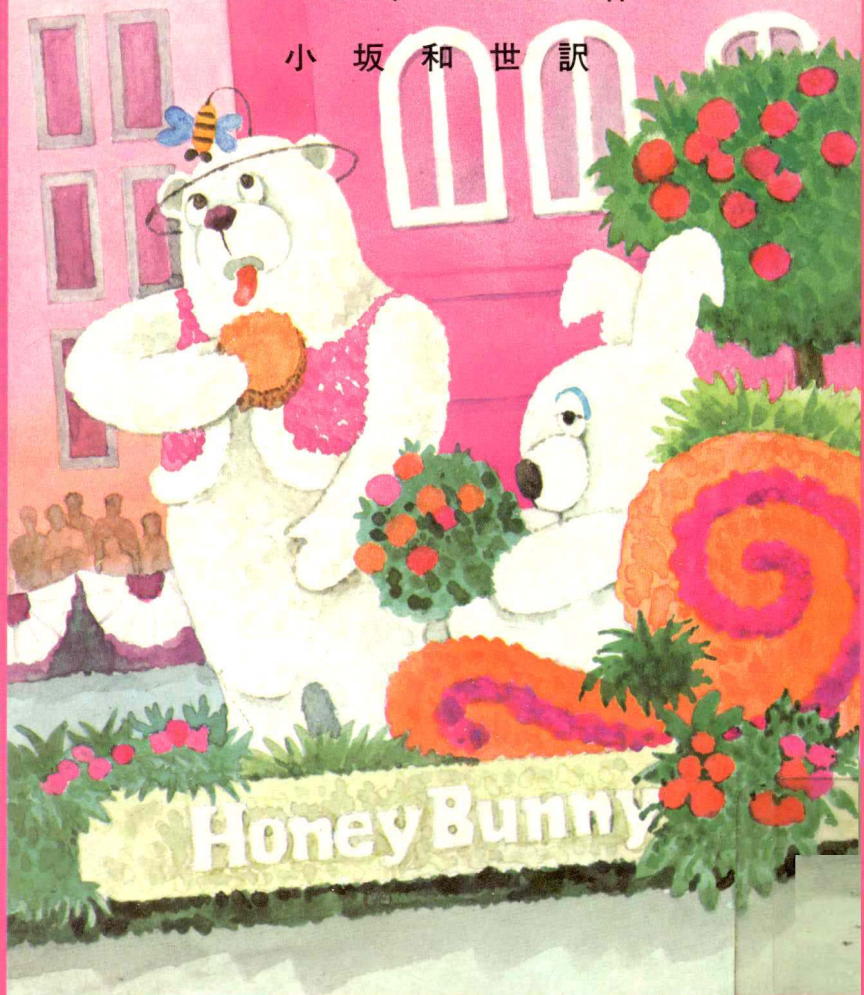


ボブシーきょうだい探偵団⑤

バラ祭り事件

ローラ・リー・ホープ 作

小坂和世 訳



933 ホープ，ローラ・リー

ボブシーきょうだい探偵団⑤
バラ祭り事件

こさかかずよ訳
佑学社 1983

162 p 19cm

ボブシーきょうだい探偵団⑤
バラ祭り事件

1983年4月30日 第1刷発行

作 者 Laura Lee Hope

訳 者 こ さか かず よ
小 坂 和 世

発行所 株式 会社 佑 学 社

代表者 三井数美

〒101 東京都千代田区猿楽町 2-3-1

電 話 東 京 291-6155~7

振 替 東 京 5-190823

印 刷 平 河 工 業

製 本 徳 住 製 本 所

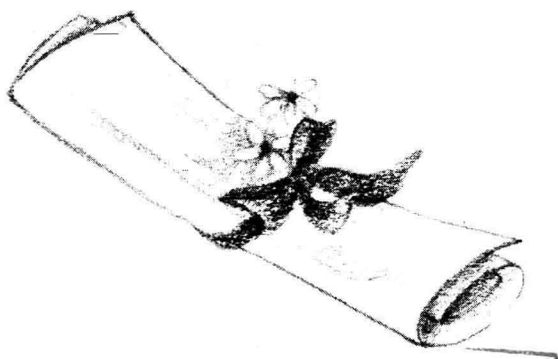
定価680円

ボブシーきょうだい探偵団⑤

バラ祭り事件

ローラ・リー・ホープ 作

小坂和世 訳



もくじ

1 アヒルのはね

6

2 みどり色の水！

25

3 犯人^{はんにん}がここに？

39

4 『宝^{たから}もの小屋』のわな

59

5 てがかりは青い布

71



6 二通の手紙

84

7 お金のなる木

96

8 レイモンドのひみつ

109

9 解決したのは半分だけ

122

10 バラのフィナーレ

144

さし絵

菊池勝子

The Bobbsey Twins 5
The Rose Parade Mystery by Laura Lee Hope
Copyright©1981 by Stratemeyer Syndicate
Published in Japan by Yugaku-sha, Ltd., Tokyo
Japanes translation rights Arranged with
the original publisher, Wanderer Books, New York
through Japan UNI Agency, Inc.

おもな登場人物

 ナナ 12歳 しっかりもののお姉さん	 バート 12歳 ハンサムでたよりになる
 フレア 6歳 やんちゃぼうず	 フロド 6歳 泣き虫でおしゃまさん

1 アヒルのはね

「あけましておめでとう！」

フロシー・ボブシーは、玄関げんかんからにこにこしながら出てきた女の人にむかって、大声でいいました。

ボブシー家には、ふたごが二組います。どちらも、男の子と女の子の組み合わせで、上のふたごがバートとナンで十二歳、下のふたごがフレディーとフロシーで六歳です。

「まだ、お正月じゃないよ」フレディーが、しかめっつらをしていいました。

「でも、もうすぐよ！」フロシーもゆずりません。

「まあまあ、二人とも」この女の人は、ハムリンさんのおくさんです。

ボブシーきょうだい、『子ども芸能コンテスト』⁽¹⁾で優勝したごほうびに、一家そろってカリフォルニアにやってきました。おとうさんとおかあさんは、足をのばしてハワイまで行くので、四人のきょう代いは、おとうさんの知りあいでパサディナに住んでいる、ハムリンさんの家にあずけられることになったのです。

ハムリンさんのおくさんは、そばかすだらけの鼻にしわをよせていいました。「けんかなんかしているひまは、ないわよ。年があけるまでに、事件をとくことになるんですから」

「事件！」上のふたごのナンとバートが、びっくりしてさげびました。

「ぼくたちみんな、事件をとくの、大すぎだよ」フレディーが胸をはっていいました。

「おばさま、どうしてそんなことがわかるの？」フロシーがききました。

「そうね、そんな気がする、とでもいうのかしら」ハムリンさんのおくさんがこたえ

ました。

「それ、直感ちよくんでしょう」バートがいました。

ナンとバートは二人とも、黒い髪かみをしていて、目も黒ですが、フレディーとフロシーのほうは、金髪きんぱつで青い目をしています。

「そのとおりよ」ハムリンさんのおくさんがいいました。「ところで、直感といえは、おじさんはここでみんなをおろしたあと、山車だしの製作所せいさくじょに行くつて、いつてなかったかしら」

ナンがはつとして、口に手をあてました。「わたし、わすれてたわ。すぐにもどるから、そうおばさまにつたえておいてつて、おじさまにたのまれてたんです」

ここで、バートが口をはさみました。「おじさんが空港くうこうまでむかえに来てくれたので、とっても助かりました。おかげで、おとうさんとおかあさんは、予定より早い便びんで、ハワイにたてたんです」

バートのことをききながら、ハムリンさんのおくさんは、玄関げんかんの正面に立っているオレンジの木を、うっとり見つめました。

「ハワイはいいところでしょうね。でもわたしたちは、古き良き南カリフォルニアがすきな。とくに、このパサディナがね」ハムリンさんのおくさんは、ここでにつきりました。「もちろん、あなたたちのご両親のように、二度目の新婚旅行しんこんりょこうに行けるとしたら、やっぱり美しい南の島をえらぶでしょうけどね」

そのとき、黒い髪くろいかみの男の子が、玄関げんかんからとび出してきたかと思うと、いきなり、みんなの中にわりこんできました。

「やあ！ ぼく、ティミー」男の子は歯を見せて、にこにこわいました。

「ぼくはフレディー。こつちがフロ——」

「ぼくと遊ばない？」ティミーは、ほかの人たちのことなんかぜんぜんおかまいなしに、フレディーだけに話しかけました。「クリスマスに、機関車きかんしゃのセットをもらったん

だ」

「機関車？　ぼく大すき！」フレディーがさけびました。

「あたしもよ」フロシーもいいました。

でも、フレディーはフロシーには目もくれないで、新しい友だちのあとについて、走っていきました。ナンとバートのほうは、旅行かばんをかかえて、ハムリンさんのおくさんといっしょに、家の中に入っていました。

「フレディーったら、つまらないおもちゃの機関車とティミーのことに、むちゆうになっちゃってるんだわ」フロシーはそんなことを考えながら、フレディーとティミーのあとを、おいかけていきました。

居間いまの中をのぞいてみると、じゅうたんの上に、銀色の細い線路せんろがしいてありました。線路は、小さいトンネルをくぐったり、こんもりした山の上を走ったりしています。機関車のえんとつからは、白いけむりが出ていて、そのけむりは、ゆつくりとて

んじょうのほうにのぼっては、きえていきました。

「ポーツ、ポーツ！」列車が汽笛を鳴らしながら、トンネルに入っていきました。

「ほら、このスイッチを動かすと、架線の切りかえができるんだよ」ティミーがフレディーに説明するのを、フロシーは居間の入口のところで、つまらなそうにきいていました。「町を通るとちゅうで、郵便車を連結することできるんだ。連結したら、また山をこえて、トンネルをぬけてもどってくるのさ」

「わあ、すごいな！ レイクポートのぼくのうちにある機関車より、ずっとおもしろい。これ、だれにもらったの？」

「エイミー・ポッターさんさ！」ティミーがこたえました。

「えつ、あの、お話を書いている人でしょ？」フレディーは、目をかがやかせていいました。「あの人の本、大すぎ。いちばんすきなのは、『テリーと魔法のフライパン』」
ちようどそのとき、機関車がシュツシュツと音をたてながら、町の中に入ってきた

ので、ティミーは、機関車きかんしゃを郵便車ゆうびんしゃの横で止めました。

「郵便車を連結れんけつして、もう一度発車させるの、やってみない？」

「うわー、やってみない！」フレディーは大よろこびでこたえと、さっそくティミーとこうたいして、スイッチがたくさんついた箱はこの前にすわりました。

「あたしも、なかまに入っている？」フロシーはいっしょに遊びたくて、しかたありませんでした。

二人の返事をまちきれずに、フロシーは機関車にむかってかけ出しました。ところが、じゅうたんにつまづいて、そのまま町の中にたおれこんでしまったから、たいへんです。線路はソファアのほうまでずれてしまうし、そのいきおいで、機関車も、じゅうたんの上にはじきとばされてしまいました。

「フロシー！ 見てよ、めっちゃめっちゃじゃないか！」フレディーはかんかんです。フロシーはゆっくりおきあがると、小さい声でいいました。「ごめんなさい」

フロシーはなみだをぼろぼろこぼしながら、居間^{いま}からとび出していきました。そのときちょうど、ティミーのおとうさんが目の前を通りかかったので、ふたりは正面^{しょうめん}衝突^{しょうつ}してしまいました。ティミーのおとうさんは、たったいまでもどってきたところだったのですが、フロシーがどうして泣^ないているのか、すぐにさっしがつきました。

「なんともないよ」ティミーのおとうさんはそういつて、フロシーをだきあげると、思いきり高くあげました。いままで泣いていたフロシーが、こんどはわらっています。すっかりきげんをなおしたフロシーを下におろすと、ハムリンさんはいいました。「うーん、この前会ったときより、ずいぶん大きくなったなあ。このぶんだと、すぐにこんなこととしてあげられなくなるぞ」

そこへ、ティミーとフレディーが、けろつとしてかけよつてきました。バートとナン、それに、ハムリンさんのおくさんもあつまつてきました。

「きみたちみんなが、びつくりするようなことがあるぞ」ハムリンさんは、大げさな

口調くちようでいいました。

「え？ なあに？」フレディーがききました。

「いまはまだ、ないしょだよ」ハムリンさんがいいました。

「わーい、これでなぞがふたつになった！」フレディーはそういうと、さっきのハムリンさんのおくさんの直感ちようかんのことを、ハムリンさんに話しました。

「さて、みんなの探偵たんていがはじまる前に、おじさんの山車だしの製作所せいさくじよに行ってみるっていうのは、どうだい？ あと少して、元旦がんたんのバラ祭り(2)に出す山車(3)ができあがるんだ」「山車のかざりつけ、おてつだいしてもいいですか？」ナンは、身をのり出していいました。

「もちろんだとも！」

さっそくみんなそろって、ハムリンさんの車にのりこもうと、外に出ました。すると、フレディーが、オレンジの木の枝えだに、なにかはでな色をしたものがかかっている

のを見つけて、みんなをよびとめました。

「ねえ、あれなあに？」

「おもちゃのロバみたいね」ナンがいました。

「ピニャータだよ」ティミーがいました。

「ピザ——なに？」フロシーがききかえました。

「ピザじゃなくて、ピニャータ」ハムリンさんがこたえました。「メキシコや南アメリカでは、クリスマスとかだれかの誕生日とか、なにか特別な日に、ピニャータをてんじょうや木の枝にぶらさげるんだ。それを子どもたちが、じゅんばんにたたきこわしてあけるんだよ」

「中にいろいろなものが入っているのよ」ハムリンさんのおくさんが、つけくわえました。

「キャンディーやくだもの、それにちよつとしたプレゼントなんかだよ」ティミーが